

研究結果報告書

所属 清華大学

役職 准教授

氏名 高 陽

研究結果

研究テーマ：金沢文庫保管の唱導資料としての「説草」研究

日本中世の法会場で頻りに使われた「説草」群は、唱導の文学の貴重な一次資料として注目されているが、それら「説草」には孝養の主題を種々見出すことができる。本研究は鎌倉時代の『弁曉説草』と『湛叡説草』における「孝行」類に関する言説の特徴とその語り口の意味について検証を試み、母と子の絆の「願力」「念力」による相互の利益、父母恩の「五体」と「四恩」、「風樹の恨」の慣用表現や真の孝を須弥芥子の喩の故事等々、様々な言説が法会で語られていたことを明らかにした。

法会は、生者と死者の交流の場であり、生者と死者との間を結ぶ絆にもなる。特に親情の中の母子愛が語られ、孝行の問題が俎上に載せられる。法会の唱導の多くは子が親を追善するパターンであり、母の恩を讃嘆し、亡者を追善することによって、現世に残された者を慰める役割を果たしていると言えよう。

唱導の形式として、まず亡者への追想から始めて、更にいくつかの物語や説話を引きながら、仏教世界の教義をふまえた説教を行うことによって、受け手の共感を引き起こし、再び生者を現実に引き戻し、生者は法会の講唱から大きな慰めを得る。唱導によって文学化された世界、あるいは歴史の真実と虚構を織り交ぜた仏教化された世界をつくり、「法会で詠まれ、語られ、うたわれ、演じられ、同時にそれを聞き、感じ、心を動かす、受けとめる側のありようも合わせ含む、唱導より上位概念としての「法会文芸」（小峯和明説）が提起されている。施主や聴聞者に心の慰めを得させ、涙を誘い、仏法への崇信の契機を生み出す作用を伴う言説の横溢をこれら「説草」の資料群は雄弁に物語っているのである。

本研究は弁曉、湛睿の二人の事例から日本中世の唱導世界における説草を中心に検討したが、さらに敦煌願文における孝行の言説との比較を今後の課題としたい。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「説草における孝養の言説」、2023年10月刊行の『アジア遊学』(勉誠出版)に掲載予定。

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)